イネいもち病（病原菌：*Pyricularia oryzae* Cavara）

○ 被害と発生生態

本病は糸状菌による病害で、水稲栽培において重要な病害である。

葉では初め円形～楕円形で、灰緑色水浸状の病斑を生じ、後に長紡錘形～菱形で中央部灰白色、周縁褐色の病斑となる。葉いもちの病斑には進行型と停止型とがあり、進行型は一般に灰緑色を呈し、発病に好適な条件が揃うとずり込み症状を呈し、甚だしい場合には枯死する。穂では、穂首、枝梗等に暗褐色の病斑を生じ、病斑部から先端は萎凋枯死して白穂となり、減収や品質低下の原因となる。

罹病種子や前年の罹病稲わらで越冬し、気温が 16℃くらいから発病が認められるようになる。山口県では６月下旬～７月上旬に初発がみられる。発病温度は 14～30℃で適温は 25℃前後となり、30℃を超えると発生しにくくなる。低温で日照不足、長雨等の気象条件や多肥栽培でイネが軟弱に生育している場合に多発する。補植用の余り苗は本ぽへの伝染源となる。出穂直後の穂は罹病性が高く、上位葉に病斑があれば重要な伝染源となる。

○ 防除方法

（ア）耕種・物理的防除

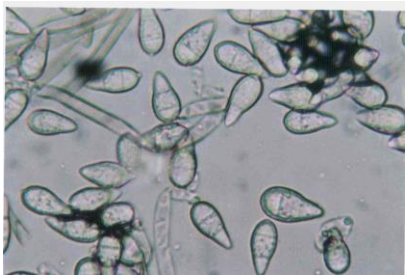
・被害わらは年内にほ場にすき込み、翌年の伝染源とならないようにする。
・健全種子を使用し、塩水選（比重 1.13 以上）を実施して、健全苗を育成する。
・ほ場に放置された補植用苗は伝染源となるので、補植が終わり次第、早期に処分する。
・窒素肥料の多用や過度の晩期追肥は発病を助長するので避ける。
・冷水灌漑や早期落水を避ける。

（イ）薬剤防除

・種子伝染防止のため種子消毒は必ず実施する。
・常習発生地域やいもち病に弱い品種では育苗箱や本田への粒剤施用を行う。
・長期持続型箱施用剤を施用した場合でも、ほ場条件や気象条件等により効果が不安定になる場合があるので、発生予察情報を参考に、ほ場を見回り、発生動向を把握し、適期に防除を行う。
・穂いもちの防除時期は、粉剤では穂ばらみ後期と穂揃期の２回、粒剤では出穂前である。雨天が続き多発が予想される場合は雨間散布を行う。
・耐性菌の発生を避けるため、作用機作の異なる剤と体系で使用する。

葉いもち

穂いもち



いもち病菌分生子